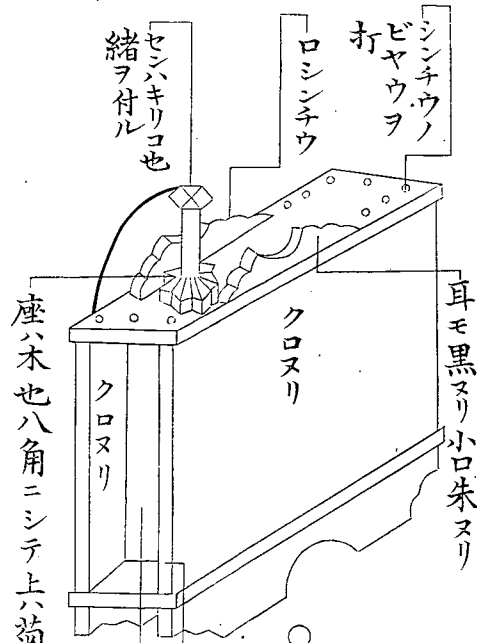


箱をさして樽にする也、ゆひだるとは常の桂を入れて、かつらを入るとは、ゆひたるを云也、さし樽はもはや當世はやらぬ物なれば、後にはあとかたもなく成るべし、依之左に繪圖を記す、

指樽の圖



惣斡黒ヌリ耳ハ朱ヌリ也

板ノ小口也朱ヌリ也

両方ノ小口如此引コミテ有

座ハ木也八角ニシテ上ハ菊座也

右のさし樽大なるも小きもあり、今は世上に澤山にはなし、

〔筆の靈 後篇六十二〕差樽は、其結樽より小出しに酒を分け入れ置て、飲人につぎあたふる具なり、

故に差とは云へるなり、さし鍋をもて酒をつぐと、同じ義にて付たる名なり、

〔伊勢貞助雜記〕一公方様へ御さしだる、或はとつくり鈴など進上被成候哉、指樽之事不及見候、進上には成まじく候、

〔晴右記〕永祿八年五月九日、正法寺指樽一荷こふじきろう持來、彼申次事被申様體申也、

〔和國小性氣質〕町に稀なる若衆後家

盛者必衰の斷、身上さんぐに落ぶれ、今は召使ふ僕もなく、溜塗の指樽一ツ、衣の衾是等の